

読み方に於ける辞書の信頼度

前 田 正 民

文字の読み方が、時代と共に変転して来ているものは非常に多いが、その読み方がいつ頃から現在のようになったかということは、容易に知り得ない。特に清濁に関しては事毎に迷う。所謂万葉仮名として、漢字を借りたものは、万葉集・古事記・日本書記等に於いて、ある程度は知り得るものもあるが、既に片仮名・平仮名が用いられるに至って濁点なしに書かれたため、清濁何れに従うべきか、古文を読むには、その時代の読み方によるべきであるが、それが不明な場合が頗る多い。古事記伝などに随分委しく記され、現代にも多くの専門学者によって研究が続けられ、辞書にもあれこれとり入れられているものの、釈然たらぬ点が実に多い。

折にふれて、手近にある新撰字鏡・倭名類聚鈔・類聚名義抄・和訓類林・以呂波字類抄・倭訓栞・雅言集覧・俚言集覧など覗いて見る。これ等の辞書も次々覆刻されて容易に入手されることは実にありがたい。しかし文字ごとに一々検索することは到底時間が許さない。結局は現代の辞書にたよる外はない。

何と言っても、「言海」は新時代を画した感がある。語彙は少ないが、発音・品詞・語原・語釈・出典・古語・俗語・和語・漢語など詳細に記されている。「ことばのいづみ」に至って著しく語彙が増加されたが、発音の方はさっぱり記されていない。しかしこれがきっかけとなって、語彙の豊富さと、言海の形式を加えた辞書が次々出版されたことは甚だよろこばしい。

上田万年・松井簡治両博士の「大日本国語辞典」が出るに及んで、その恩恵は絶大である。更に、ことばのいづみ

を改修した「言泉」、言海を改修した「大言海」も出た。平凡社の「大辞典」になると、輯録範囲も一層拡充され、百科辞典を兼ねるに至り、利用価値も一層増して来た。

漢字の字典では、「康熙字典」の日本語版を基として、三省堂の「漢和大辞典」を始め、「大字典」「字源」、服部・小柳兩氏の「詳解漢和字典」等を経て、諸橋轍次氏の「大漢和辞典」が出現するに至った。

併し、終戦後、現代仮名遣や、常用漢字が制定され、その要望から、現代語を主とした学生や一般社会向のもので、昭和二十七年に、三省堂から、金田一京助氏等の「明解国語辞典」や、昭和三十八年に岩波書店から、西尾実・岩淵悦太郎兩氏の「岩波国語辞典」、昭和三十三年に、武田祐吉・久松潜一兩氏の「角川古語辞典」も出た。

さてこれ等の辞典によって、読み方を調べて見ると、区々様々である。ここに数語をあげて並べて見ることとする。辞書名は一部本来のまま記すが、他は次の括弧内の略語を用いる。

倭名類聚鈔（和名抄）

類聚名義抄（名義抄）

以呂波字類抄（字類抄）

雅言集覧（雅言）

俚言集覧（俚言）

大日本国語辞典（大国）

大言海（大言）

大辞典（大辞）

詳解漢和字典（詳漢）

大漢和辞典(大漢)

明解国語辞典(明国)

岩波国語辞典(岩波)

角川古語辞典(角古)

○うま(馬) うめ(梅)

久しく、シマ・シメのように発音されている言葉で、埋れ木・姥・生れるなども同様である。上古我が国にはシの音がなく、「シ」「ん」の仮名も鎌倉時代以後次第に用いるようになったと言われる。

(新撰字鏡)の「馬」字に訓は示されていないが、「秣」には、宇末久佐とある。「梅」にも訓は書いてない。中古時代の物語などを記した古写本(定家自筆本などいう種類)など、うま・むま、うめ・むめなどと書いてあることは周知のことである。

(和名抄)には「馬」は無万、「梅」は宇女としてある。

(名義抄)には「馬」にウマ、「梅」にウメ・ムメノキとしてあるが、「馬」に関係のある語は、例えば、「錢」ムマノハナムケ、「午」ムマノトキとしている。

(字類抄)では、「无」(む)の部に、「馬」ムマ、「梅」ムメ、「宇」の部に、「馬」ウマ、「梅」ウメと双方出ている。

(倭訓栞)の「むま」の条に、「馬をいふ倭名抄むまと訓す日本紀万葉集皆うまと見えたり万葉集中東歌に一所むまと書り(中略)○古きはうまと書り今常にしたかひむとしなしぬ以下馬午是に準す」とある。又「むめ」の条に、「梅をいふ昔はうめとのみ書るを今はかく書ならへり万葉集に一所牟字を用たり一説には宇の誤写なりといへ

り」とある。

(雅言)に、「うま」馬。

(俚言)に、「〔むま〕馬也古へはウマといふ 〔むめ〕梅○古へウメの仮字なれども中古よりムメといへり今通に从てムに収む」とある。

但し「う」の部に、「うまのす」「うまぶね」「梅の花笠」などが出ている。

(日葡辞書)は、Vma・Vme 即ちウマ・ウメである。

(広文庫) うま・うめについて諸書を引用してあるが、読み仮名に関係のあるところを次に抜書する。

馬

和名鈔 麻之上声和名無万

万葉集抄をひいた中にウマの文字が屢々書かれている。

日本釈名 馬、まといはんとて、むの字を付けたたり、むはまの発語也、まは馬の字の音也、音を以て訓とせし例おほし、

倭訓栞 うま 馬といふ、称美の名なるべし、一説に胡馬クマの音、国華合記集にも、馬を胡馬と書せるは、武備志に牛を胡水クヰと書せるが如くなる也ともいへり、

名言通 ウマラムマトスルハ、モト万葉集文字ノ誤ニヨル字誤デ
牟トス

物類称呼 むま、下総国にては、まあとよぶ

梅

和名抄 和名字女

東雅 梅ウメ 万葉集に烏梅の字を読んでウメといひしは、漢音を借りてしるせしなり、
日本釈名 梅万葉にうめとよめり、順和名抄にもうめと訓ず、花なきときさきてうつくしくめづらしき意を以て、うめと云う、うとむと通ずる故にむめとも云う。

倭訓栞の梅の条をも引いている。

名言通

ウメヨムメトカクハ、モト万葉集文字ノ誤ニヨル、

字誤リテ
牟トス

又ウメハモト字音バイ、マイ、メイ、相転ト

云フ説ウ字ヲ失ス、未タ据ルベカラズ

小学校の国定読本であった頃の指導書には、シマ・シメと読ますように書いてあったが、言海以後の辞書では、うま・うめなどの項にはシマ・シメの発音を示さず。(言泉)と(明国)にに次のように載っている。

(言泉)の「ん」の項に、「うまる(生る)・うま(馬)・うめ(梅)の如きは、実際の発音はシマル・シマ・シメなるに、古よりうの仮名を用ひ来れると同時に、むらさめ(村雨)・むかし(昔)などんらさめ・んかしと記せる類、古書に往往その例あり。」とある。

(明国)「ん」のところに、「んま——うま 例、「んま(馬)——うま。んめ——うめ 例、「んめ(梅)——うめ 例、「んめ(梅)——うめ。んも—— 例、「んも(埋れる)——うもれる。」としてある。

但し(言泉)(明国)とも、馬・梅の説明等は「うま」「うめ」の項に、シマ・シメの発音を記さずに載せてある。しかし謡曲では必ずシマ・シメなどと謡うことに注意したい。

例 馬(シマ)引き返し「敦盛」

偕は此梅(シメ)は「東北」

埋木(シモレギ)の「頼政」

此所にて生

(シマ)れ「唐船」

姥(シバ)や給へ「国栖」

◎要するにシマ・シメの発音は室町時代には確実に存在したと言い得る。唯(日葡辞典)にウマ・ウメとあるのは

果たしてウ・マ、ウ・メの如く読むのか疑問がある。

○なほし (直衣)

これは今日日常語ではないが、(言海)・(大言)・(大国)・(大辞)・(岩波)・(明国)・(角古)等すべて、ノオシ・ノウシ・ノーシなどと発音を示している。(言泉)の如き発音をあまり示していないのに、「なほし」の項に、『直はなほびと(直人)などのなほにて、礼服・朝服などならぬ唯の服の義。ノオシと発音す』と書いてある。

これを古い辞書で見ると、次の如くである。

(和名抄) 欄衫 須曾豆介乃古路毛一云奈保之能古呂毛

(名義抄) ナホシノ衣

(倭訓栞) 「なほし」の項に、「直衣は倭名抄に欄衫なほしのころもと見えたり」

(雅言) なほし

(俚言) 直衣^{ナホシ}ナフシの如くとなふ〔伊勢貞丈随筆〕

古川引文館発行の増訂故実叢書中、「直衣」に仮名読のあるものを抜き出して見ると、

(日中行事略解) 御装束^{御なほし}奉りて

(禁中方名目鈔校註) 直衣^{ナラシ}

(武家名目抄) 御引直衣の項に、「御ひきなふし」

(貞文雜記) 装束類之部に、「御引直衣^{ヒキナラシ}又御下直衣^{サゲナラシ}」

(装束集成) 直衣、かなづかひには、なをしなれども、よむにはなふしと読事、習ひ也。

などである。

(倭漢三才図会) には、直衣のところに、「のをし」と書き、下方に「奈乎之稱ニ乃乎之」とある。

(広文庫)「なほし」の項に、装束要領抄の「直衣、かなづかひにはなほしなれども、なふしとよむ事ならひ也、」更に、和漢三才図会・倭訓栞等の文言(前記参照)を引いてある。

(難訓辞典)―啓成社発行、井上頼圀・高山昇・菟田茂丸合編―「直衣」の項にはナフシ「名目」とある。

(日葡辞書) には、*Nanoxi* とあって、即ちナヲシである。この辞書は慶長八年に本編、翌年補遺となっているもので、外人の書いたものであるから、我々の耳や口にするところと多少の差違もあるうと思われる。前記のウマ・ウメのところで、少し疑いを残したが、ナヲシに至っては信頼感が深い。

謡曲「井筒」に、「形見の直衣」「冠直衣は女とも見えず」、同じく「国栖」に、「玉の冠直衣の袖」という語句があり、観世流現行本にはノオシ又はノヲシの発音がつけてあるが、宝生流ではナオシの仮名をつけナヲシの如く謡うのである。観世流では後にノオシにしたのではないかと思う。

宣長の三音考の附録「音便ノ事」のところに、「直会ナホツヒをナウラヒ。直衣ナホレヲナウシ。」の文言が見えているが、当時はノオシになっていたことは明らかである。

◎以上によって見ると室町時代まではナオシで、その後ノオシに変じたものと考えられる。今の辞書にノオシとなっているのを鵜呑にすることには尠らず抵抗を感じる。

○「かがやく」と「かかやく」今日一般に漢字では「輝」の字を用いる。万葉仮名で書かれているものには清濁不明の場合があり、仮名も古くは濁音をつけなかったから不明のものがあるが、ここにはそのまま記しておく。

(字鏡) には、晟・熠・焯・奔・玲々・灼々の字、何れも加加也久とある。

(和名抄) には見えない。

(名義抄) 晟・熠・濯・威・赫など四十字の漢字を掲げ、何れもカカヤクとなっている。

(字類抄) すべての語に濁音の記号がないので参考にならない。

(日葡辞書) *Cacayagu* カカヤクにある。

(倭訓栞) かかやく

(雅言) かがやく

(俚言) かかやくの項の下に「耀下濁 ○〔倭訓栞〕カ、明ラカなるをいへり赫字の意なり (下略)」

(角古) かがやくⅡ かかやく

(大言)・(言泉)・(大国)・(明国)・(岩波) 何れも「かがやく」だけ示している。

(大辞) は「カカヤク」の項に輝^{かがや}くに同じ。加増曾我・三^江宝永「たい松はるかにかかやきたり」曆・一^江御殿
かかやく斗也」

「カガヤク」の項に語釈を施し、袖代紀・源氏・枕草子から引例してある。

◎日葡辞書もカカヤクに従っており、謡曲ではすべてカカヤクであるから、室町時代まではカカヤクであったに違いない。カガヤクになったのは江戸時代後であろう。(大辞)の文例の引き方も実に変な感じがする。

○ほとばしる・ほどばしる——逆

ホドハシル (雅言)

ホトバシル (倭訓栞) (大言) (言泉) (明国) (岩波) (大漢和)

ホドバシル (大国) (大辞) (芳賀新式辞典) (詳漢) (大字典)

○まっしぐら・まっしぐら

マッシクラ又はマッシクラニ（倭訓栞）（俚言）（大言）（大國）

マッシグラ又はマッシグラニ（言泉）（大辞）（大字典）（詳漢）（大漢和）（明国）（岩波）
以下漢語を二三掲げる。

○緒言・情緒・心緒などの「緒」は本来「シヨ」が正しいのであるが、近來は「チヨ」と読む人が多くなり、辞書にも取り入れられるようになって来ている。

緒言

（大言）「ちよげんの項に、「しよげん（緒言）ノ誤。其条を見よ。」とし、しよげんの項に解を記す。

（大國）「ちよげん」の項に、「しよげん（緒言）を見よ。」とし、「しよげん」の項に解がある。

（言泉）「ちよげん」の項に、「しよげん（緒言）の誤読。」とし、「しよげん」の項に解がある。

（大辞）「チヨゲン」の項には「しよげん（緒言）」とし、「シヨゲン」の項に解を示す。

（明国）右と同じい。

（岩波）「ちよげん」の項に、「しよげん」の慣用読みとし、「しよげん」の項に説明。「ちよげん」とも言う。とある。

（大字典）（詳漢）（大漢和）何れもシヨゲンだけ示してある。

情緒

（大言）は、「じやうしよ」だけ。

（大辞）は、「シヨーチヨ」だけ。

（言泉）「じやうちよ」の条に、「じやうしよ（情緒）の誤読。」とし「じやうしよ」の項で意義を記す。

(大國) 「じやうちよ」の項に、「じやうしよ(情緒)の誤り。」とし、「じやうしよ」の項で解を示す。

(明國) 「じょおちよ」の項に「正しくは「じょうしよ」」として解し、「じょおしよ」の項に、「じょうちよ」としている。

(岩波) 「じょうちよ」の項に解を示し、「じょうしよ」が正しく、「じょうちよ」は慣用読み。とし、「じょうしよ」の項に「――じょうちよ」としている。

(詳漢) ジャウシヨだけ。

(大漢和) は、ジャウシヨ・ジャウチヨ両方記している。

心緒

(大言) (大國) (言泉) (大辭) (大字典) (詳漢) (大漢和) 皆シンシヨだけ示している。

(明國) 「しんしよ」の項に、「『おもいのはし。しんちよ。』とし、「しんちよ」の項に、「しんしよ。」「――麻の如く乱れて」とある。

(岩波) 「しんしよ」の項に、「しんちよ」とし、「しんちよ」の項に、「心が動くいとぐち。思いのはしはし。」とある。

端緒

(大言) 「たんしよ」だけ出ている。

(言泉) 「たんしよ」と「たんちよ」の項を設け、「たんちよ」の項には、「たんしよ」の誤読。としてある。

(大國) も、「たんしよ」と「たんちよ」の項を設け、「たんちよ」の項には、「たんしよ(端緒)を見よ。」「としてある。

(大辞) 「タンシヨ」と「タンチヨ」の項を設け、「タンチヨ」の項に、「たんしよ」の誤読。とし、両項に解及び引例を出している。

(明国) 「たんしよ」と「たんちよ」を設け、「たんちよ」の項には、「たんしよ」のなまり。とある。

(岩波) も、「たんしよ」・「たんちよ」両方を設け、「たんちよ」の項には、「たんしよ」の読み誤り、とある。

(大字典) (詳漢) (大漢和) 何れも「タンシヨ」の読だけ書いてある。

消耗

(大言) 「せうかう」^{シヨウコウ}の項に、「耗ハ、虚到切、かうナリ、博雅に「滅也」正韻ニ「虚也」トアリ、又、虚耗^{キョウカウ}ノ語モアリ、まうハ、誤読」とあって、シヨーマーの項はない。

(大國) 「せうかう」の項だけあって、「せうまう」は出ていない。

(言泉) 「せうかう」の項に、「消費してへらすこと。又、使用すれば消失すること。せうまう。」と記し、「せうまう」の項には、「せうかう(消耗)の誤読。」としてある。

(大辞) 「シヨーマー」の項に、「俗にせうまうと読む。」とし、解を記し、「シヨーマー」の項に「消耗^{キョウカウ}の誤読。」としてある。

(明国) 「しよおこお」の項に、「しよもう。」とし、「しよおもお」の項、「正しくは「しよこう」とし、解を記す。

(岩波) は(明国)と同じ扱いをしている。

(大字典) は、セウ・モウ(セウ・カウ)としてある。

(詳漢) セウカウとしてある。

(大漢和) セウマウ・セウカウとしてある。

洗滌

(大言) せんでき。

(大國) せんでき。

(言泉) 「せんでき」「せんでう」の兩項を設け、「せんでう」の項には、せんできの誤読。としてある。

(大辞) 「センジョー」の項に「センヂョ洗滌」とし、「センデキ」の項に解を記す。

(明國) 「せんでき」の項に、「あらいそそぐこと。せんじょう。」とし、「せんじょう」の項に、「水をかけてあらうこと。せんでき。」とある。

(岩波) 「せんじょう」・「せんでき」兩項に出し、「せんじょう」の項に、「洗滌」は正しくは「せんでき。」とし、「せんでき」の項に、ただし「せんでき」が、もとの正しいよみ。としてある。

(大字典) (大漢和) は「センデキ」としている。

(詳漢) は「センテキ」と清んでいる。

◎漢語の「緒言」以下の例は、現代一般の読み方が、以前の読み方と違って来ているのを、普通の辞書にどう扱っているかを調べて見たのである。

以上僅かの例であるが、少なくとも私自身辞書への信頼度の低いことを訴えた次第である。